

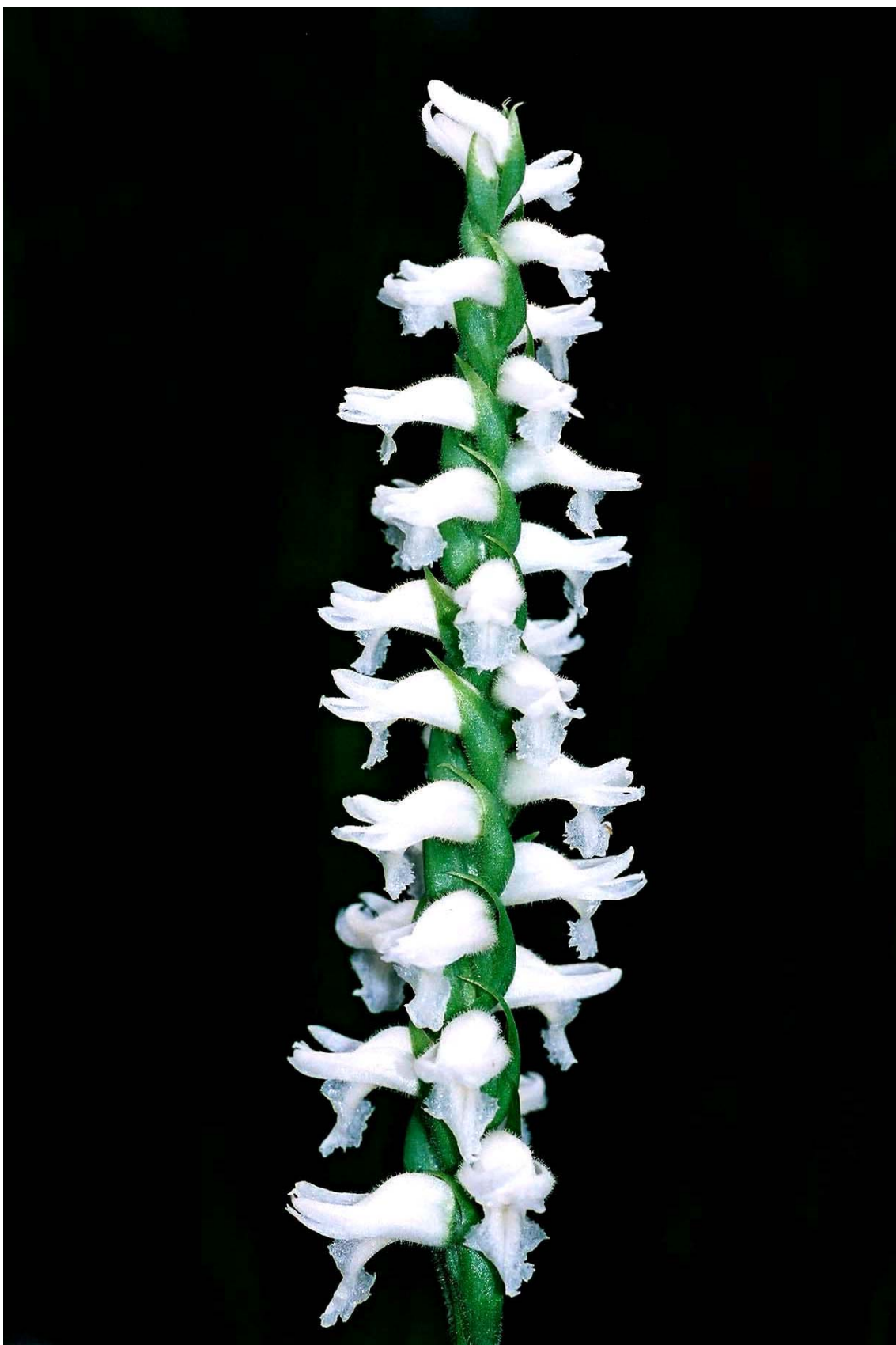
## 10) ネジバナ=捩花=文字摺

ネジバナはラン科の多年草である。北海道から本州、四国、九州、海外では中国、朝鮮半島、ヒマラヤ、さらには千島や樺太にも分布する。陽当たりの良い原野や芝生などに生え、乾燥したところにも、やや湿り気の多いところにもよく生育し、群生することも少なくない。高さは15~30cmほどになり、地中には白色で多肉の紡錘根がある。根生葉は長さ5~20cmの線状で、幅は3~10mm、数枚着くのが普通である。初夏、葉のあいだから長さ10~30cmの花茎を出し、桃紅色で唇弁が白色の可憐な小花を螺旋状に多数着け、この螺旋は左巻きも右巻きもある。また花色も白から濃桃色、淡桃色など様々で変化が多い。和名の由来は花が螺旋状に着くため、別称としてはモジヅリ、ネジガネソウなどである。学名は『*Spiranthes sinensis*』で、属名は「speira=螺旋」と「anthos=花」との合成語で、種小辞は中国のという意味である。イギリスでは『lady's-tress』または『pearl twist』で、「tress」は女性の巻髪のことを意味している。中国では『盤龍参』と呼ばれている。

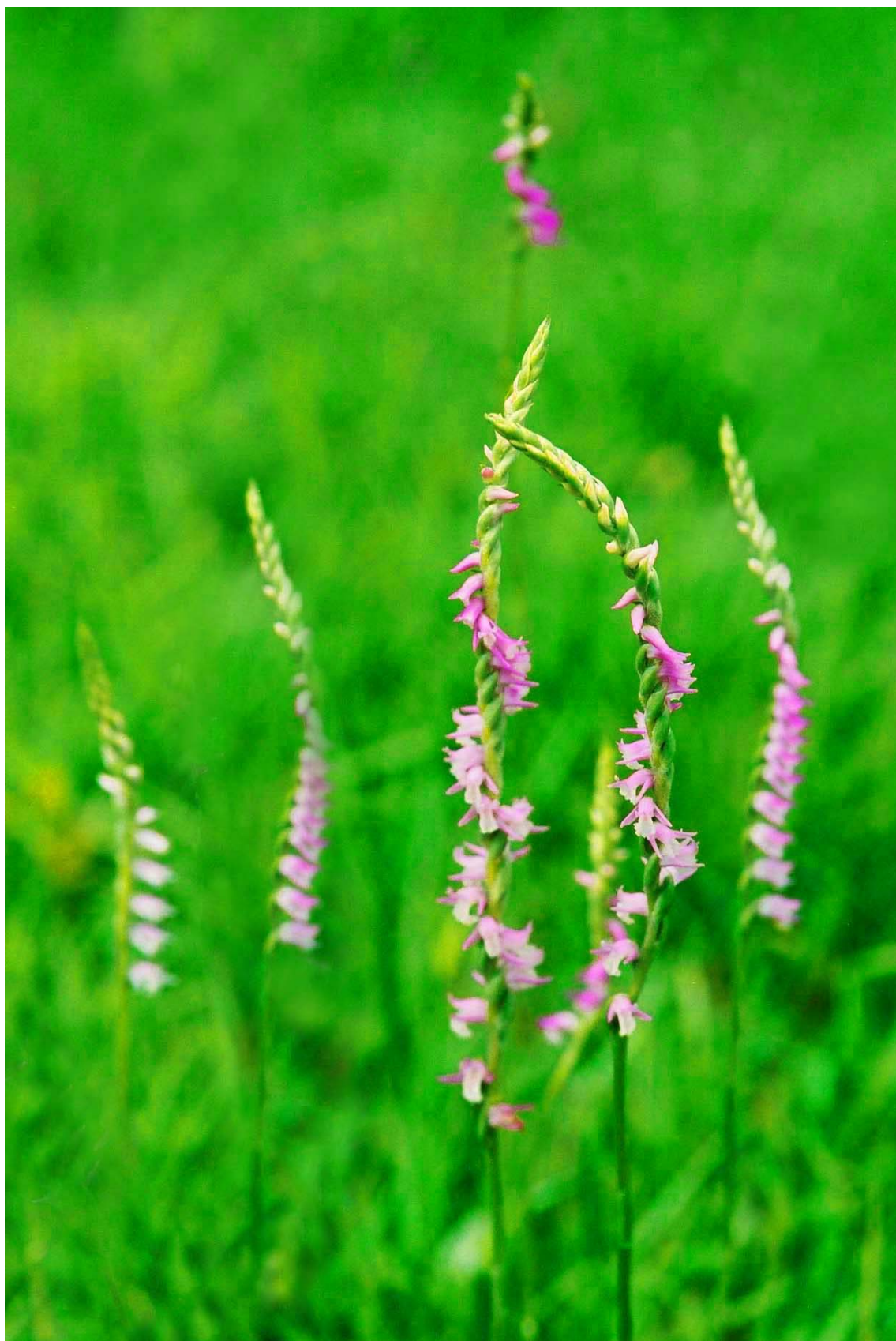
ネジバナは花が美しいため濫獲され、減少している花の一つである。江戸時代には栽培されていたようで『花壇綱目』や『花壇地錦抄』などに、その記録が見える。しかしネジバナの根は菌根となって菌類と共生して生育するため、単独の栽培は難しく、ほとんどの場合は数年で枯れてしまう。ネジバナの菌根菌として知られるものは植物の枯木や枯枝が腐敗した、いわゆる『植物遺体』を分解して生活する菌類である。この菌類に支えられながらネジバナも生存することができるわけで、菌類が弱ればネジバナも元気がなくなるという仕組みになっている。キンランやギンラン(01-02-14)、イチヤクソウやギンリュウソウ(04-01-09)、などがこれに近い植物である。

ネジバナは『万葉集』や『勅撰和歌集』には見る事ができない。『伊勢物語』には  
みちのくのしのぶもちずりたれゆゑに 乱れそめにしわれならなくに  
という一首がおさめられており、その意味は、あなたと知り合ったがために、私の心の乱れを隠しておくことができなくなってしまった、というほどのものであろうか。ここでみちのくはしのぶを引き出すための言葉で、信夫と忍ぶが掛け詞として用いられている。またこの歌碑は福島市の中央にそびえる信夫山の公園に立てられている。さてその『しのぶもちずり』(信夫捩摺)とは一体いかがなものなのだろうか。

奈良時代末期から平安時代になると、奥州地方は養蚕業が盛んになり、都に絹織物が献上されたらしい。この信夫郡の織物は摺染めする際に、自然石である綾形石を用いて行なわれた。このために特徴のある不規則な文様が現れ、これを貴族たちは『信夫捩摺』と称して狩衣などに用い、もてはやさすようになったのである。しかしこれに対して単に色彩や紋様が入り乱れて染められ、その模様が優雅だったとする説もある。これはやがて陸奥のあちこちで生産されるようになったが、時代の変遷とともにこの伝統は途絶え、今では痕跡をとどめていないことが惜しまれる。



白花種のネジバナ(園芸品)は、滅多に見ることのできない珍種である。



芝生の中に顔を出したネジバナ(さいたま市緑区園芸植物園)。



ネジバナは芝生と共生することが多く、移植しても根付かない(さいたま市緑区)。



ネジバナは芝生などと共棲していることが多いが、ここは所沢の霊園内で、桜並木の下で生育していた。道路の反対側の桜並木には芝が植えられていたが、そこにはネジバナはなく、こちら側は芝がないのにネジバナがある。何か釈然としない不思議さを感じた。

[目次に戻る](#)